

はじめに

「音声の指導は大切！」ということは、英語教員はみな共通認識として持っているはずです。ところが、実際の英語教育の現場では、音声指導は軽視されがちです。これはなぜなのでしょうか？　その理由をまず考えてみたいと思います。

「音声指導は後回しでよい」という意見を聞くことがあります。理由としてよく耳にするのは、「発音は完璧でなくても通じればよい、大切なのは発音ではなく中身なのだ」といった考え方です。しかし、そもそも「通じる」ためには、通じるための適切な発音が必要であることを忘れてはいけません。そして外国語の場合、母語とは異なり、何もしなくとも自然と「通じる発音」が身につくわけではなく、適切な指導が必要なのです。

音声指導が後回しにされる理由として、「教える時間ががないから」という現実的な問題も聞きます。たしかに、限られた授業時間の中で、文法・語彙・読解・作文など多くのことを教えることには、音声指導に長い時間をとることは難しい状況であるのも事実です。

しかし、日本語であれ外国語であれ、ことばによるコミュニケーションの根幹を成すのは音声です。毎日の生活を送る中で、音声によるコミュニケーションなしで一日を過ごすことはほとんどありません。生徒たちが、英語の音声をきちんと聞き取り、発音できるようになるためには、授業で音声を教えることが必要なのです。そしてそのためには、英語を教える教員が、音声指導についての十分な知識と技術を持っていることが不可欠です。

本書は、英語教員を対象に、「音声指導の基本」を解説する本です。一番の特徴は、「この一冊を読めば、音声指導の全体像がつかめる」ようになっていることです。英語音声を細部まで理解するためには、専門的な本を読んだり、発音練習を重ねたりする必要があります。ただ、いきなり専門的な本を読んでも、内容が理解しにくかったり、指導に生かしづらかったりします。そこで本書では、生徒が「わかりやすく通じる英語発音」ができるようになるために「これだけは押さえておきたい」という優先度の高い項目を、

Q&A 形式でわかりやすく解説する内容にしました。小学校・中学校・高校で英語を教えていたる先生や、教員を目指す学生に、ぜひ手にとっていただきたいです。

私たちは、英語の音を研究する学問分野である、英語音声学を専門としています。これまで、「日本語母語話者は英語の音声のどこを難しいと感じるのか」「どのような英語発音が聞き取りやすいのか」といったことを研究してきました。また大学教員として、英語の教員免許状の取得を目指す学生を対象に、音声学の指導もしています。

本書は、私たちが研究で得た知見と、大学生への指導経験をもとに執筆しています。発音や聞き取りには個人差があり、「この方法で教えれば必ず身につく！」という魔法の指導法は残念ながらありません。ただ、これまでの経験から、「この説明なら理解してもらえる・効果がある」というアイディアを、ふんだんに盛り込んであります。本書を、実際の音声指導に少しでも役立ててもらえれば幸いです。

本書の執筆は、多くの方々の支えなしには実現しませんでした。研究社編集部の高野涉氏には、本書の構成や内容から、文章表現、煩雑な音声表記のチェックまで、大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。原稿に多くの貴重なご助言を下さった清水あつ子先生、様々な相談にのって下さった斎藤弘子先生にも厚くお礼を申し上げます。また、音声学の奥深さを教えて下さった故 竹林滋先生に、本書執筆のご報告ができることをとても嬉しい思います。

私たちの授業や研究は、様々な反応とインプットを与えてくれる学生たちがいてはじめて成り立つものです。これまで関わった学生のみなさん、ありがとうございました。最後に、勉学の機会を与え、研究をずっと見守ってくれているそれぞれの両親に、心から感謝します。

2020年3月
内田洋子・杉本淳子

目次

| | |
|----------------|------|
| はじめに | iii |
| 音声・解説のダウンロード方法 | viii |
| 本書で用いる記号 | ix |

第Ⅰ部 音声指導の知識編 1

| | |
|----------------|---|
| 音声指導には何が必要なのか？ | 2 |
|----------------|---|

〈英語はどんな言語か〉

| | |
|-----------------------------|----|
| Q1 いま世界ではどのような英語が話されているのか？ | 4 |
| Q2 アメリカ発音とイギリス発音は何が違うのか？ | 8 |
| Q3 ノン・ネイティブの先生が発音を教えてよいのか？ | 12 |
| コラム! 発音に対する先生の自信——アンケート調査より | 16 |

〈音声指導のモデルとゴール〉

| | |
|-----------------------------|----|
| Q4 どんな英語の発音をモデルとして教えてらよいのか？ | 18 |
| Q5 どんな英語の発音をゴールに設定すればよいのか？ | 22 |
| Q6 優先して教えるべき音はあるのか？ | 26 |

〈音声学の基礎知識〉

| | |
|--------------------------|----|
| Q7 英語音声はどんな要素で成り立っているのか？ | 30 |
| Q8 イントネーションとは？ | 32 |
| Q9 音節とは？ | 36 |
| Q10 強勢とリズムとは？ | 40 |
| Q11 両唇・歯茎・軟口蓋とは？ | 45 |
| Q12 母音とは？ | 48 |
| Q13 子音とは？ | 51 |
| Q14 音素と異音とは？ | 55 |
| Q15 英語のつづり字と発音に規則性はあるのか？ | 59 |

第 II 部 音声指導の実践編 63

音声指導はどのように授業にもりこめばよいのか? 64

〈音声指導の基本〉

Q16 発音をカタカナで表現してよいのか? 68

Q17 フォニックスで知っておくべきルールとは? 74

Q18 フォニックスを授業にどう取り入れるのか? 80

Q19 詞書は発音の指導に役立つか? 84

コラム④ /ə:/ と /ɔ:/ の違いは何? 89

Q20 発音はどう評価すればよいのか? 90

Q21 リスニングの素材はどう選ぶのか? 95

〈談話レベルの発音〉

Q22 イントネーションはどう教えるのか? 99

Q23 長い文はどこで区切ると教えるのか? 104

Q24 強い単語と弱い単語の違いはどう教えるのか? 110

Q25 文のどこを強調して発音するように教えるのか? 115

Q26 英語らしいリズムはどう練習すればよいのか? 119

コラム⑤ 強勢の位置は変わることもある 124

Q27 単語をつなげる発音はどう教えるのか? 125

Q28 英語の歌を使うことにはどんなねらいがあるのか? 129

〈単語レベルの発音〉

Q29 単語の発音はどう教えるのか? 133

Q30 語強勢の位置を知るコツはあるのか? 136

コラム⑥ 語が2つ以上続いたときの強勢はどうなる? 142

Q31 /b/-/v/ : Best-Vestの違いはどう教えるのか? 143

Q32 /l/-/r/ : Light-Rightの違いはどう教えるのか? 146

Q33 様々な/l/ : Appleは「アボー」と教えてよいのか? 152

コラム⑦ 暗いLについてもっと知りたい 156

Q34 /s/-/θ/ : Sink-Thinkの違いはどう教えるのか? 157

Q35 /s/-/ʃ/ : Sea-She の違いはどう教えるのか? 162

Q36 /b/-/f/ : Hood と Food は何に気をつけて教えるのか? 167

Q37 /p, t, k/ : バ・タ・カ行の子音と同じ音だと教えてよいのか? 172

Q38 /d/-/t/ : Bit-Beat の違いはどう教えるのか? 177

Q39 /æ/-/ʌ/-/ɑ:/ : Hat-Hut-Hot の違いはどう教えるのか? 182

Q40 /ɑ:/-/aʊ/ : Firm-Farm の違いはどう教えるのか? 186

Q41 /ou/-/ɔ:/ : Low-Law の違いはどう教えるのか? 190

Q42 過去形-edや複数形-sの発音はどう教えるのか? 194

付 錄 198

参考文献 200

索引 203

優先して教えるべき音はあるのか？

英語には、/l/ や /r/ など日本語にはない音が多くありますが、授業ではすべてを取り上げる時間もないし、生徒たちは混乱してしまいかねません。「絶対に教えるべき音」と「後回しにしてもよい音」の分類はありますか？

A 教える優先度の高い音・低い音は存在します。まず優先度の高い音に絞って教え、時間や生徒の興味に応じて、それ以外の項目も教えていくとよいでしょう。

対照分析による英語・日本語の音声比較

まず知っておくべきは、英語の音と日本語の音はかなり違うということです。英語には日本語と似た母音や子音もありますが、違う口の動かし方をしないといけないものや、日本語とは違って聞こえるものもたくさんあります。特に、母音の数は日本語と比べものにならないほど多いですし、母音・子音の組み合わせ方、リズムやインтонаctionまで考え始めると、ずいぶんと音の体系や構造が異なることが見えてきます。

このように、2言語の違いに注目する考え方を対照分析 (contrastive analysis) と呼びます。学習者向けの音声学テキストの多くは、対照分析に基づいて記述されています（竹林・斎藤, 2008）。

ただし、英語と日本語の差異を網羅的に記述すると、膨大な数にのぼります。すべての差異を気にかけて、「英語母語話者のように」発音し聞き取れるようになることはそう簡単ではありませんし、教員の立場からしてもすべてを丁寧に教えるだけの時間はありません。

となると、対照分析で得られた結果をもとにしても、その中から最低限、克服すべき違いに焦点を絞るのが得策ということになります。つまり、まずは「これだけは押さえておけば聞き取りに困らず、コミュニケーションで問題とならない発音」の習得を目標とするのです。その上で、必要に応じて習得する発音の項目を増やしていくのが現実的です。

理解してもらえない問題となる音を優先する

次のような発音をした場合、聞き手の理解度にはどれくらいの影響があるでしょうか？

- (1) Look! A plane is flying into a cloud!
- (2)サンキュー for the present!

あえてカタカナ表記にした(1)の「クラウド」は、発音の仕方によってcloudかcrowdに聞かれる可能性のあるもの、すなわち/l/-/r/が問題になるものです。cloudは「雲」ですが、crowdは「群衆」。飛行機がどちらに突っ込んでいるのかで、大きな意味の違いが生まれてしまいます。

このように、英語の/l/-/r/には、言い間違えると意味が変わってしまうような単語ペアがたくさんあります。lead-read, long-wrong, collect-correct, belly-berry, glass-grass, play-pray…など枚挙にいとまがありません。このように、英語の/l/-/r/は「意味の区別をつける上で責任を担うことが多い」という意味で、「機能負担量 (functional load) が高い」という言い方をすることがあります (Brown, 1991; Catford, 1987)。

機能負担量が高い英語の母音や子音のペアには、他にも/u/-/i/, /oʊ/-/ɔ/, /s/-/ʃ/, /t/-/d/, /m/-/n/などがあります。これらのペアは、言い間違えるとコミュニケーション上、問題になる確率が高いといえます。

次に、(2) のように感謝の気持ちを伝えるケース。日本語には/θ/に相当する音がないため、代わりに [s] の音を当てて発音することが多いですね。

このように、thankをsankのような音で発音しても、多少不自然ではあるものの意味が通じない可能性は少ないのでしょう。なぜなら、文法的に考えれば文頭の位置に過去形のsankがくることはないからです。聞き手は實際にはsankと聞こえても、thankだろうと考え直してくれるわけです。

/l/-/r/ 同様、/s/-/θ/にも意味が変わってしまう単語ペアがたしかにすぐに思いつきます。think-sink, sigh-thigh, seem-theme, pass-path, force-fourth, …など。しかし、/s/-/θ/は/l/-/r/よりも機能負担量が低いと分析されています (Brown, 1991)。機能負担量が低い単語ペアは、品詞が違っていたり、語彙としての一般度がペアのいずれかに偏っていたりするため、音声的には混同しても文法的・文脈的に正しい判断ができると考えられます。

英語発音はどんな要素で成り立っているのか？

英語の「発音」は、どのような要素で成り立っているのでしょうか？ どんな要素を基本的な知識として知っておく必要がありますか？

A 英語の文には必ず「イントネーション」があり、その土台となるのが強弱の「リズム」です。そして、文を構成する個々の単語は「強勢」を持ち、「母音」と「子音」で構成されます。

英語音声の構成要素

下図は、英語音声の構成要素を、We'll have a party tomorrow. という文を例に示しています。以下、それぞれの要素について見ていきましょう。

| | | | | | |
|----------|-------|--------------------|-----|----------------------------|-------------------------------|
| イントネーション | we'll | have | a | <u>PARTy</u> | tomorrow |
| リズム | we'll | <u>ha<u>ve</u></u> | a | <u>par<u>ty</u></u> | <u>tom<u>or<u>row</u></u></u> |
| 音節・強勢 | we'll | há <u>ve</u> | a | pár.u <u>ty</u> | to.mór.u <u>row</u> |
| 母音・子音 | /wɪl/ | /hæv/ | /ə/ | /pa <u>ɾ</u> .t <u>i</u> / | /tə.mar.u <u>o</u> / |

図6 英語音声の構成要素

文の発音

文はイントネーション (intonation) というメロディを持っています (→ Q.8)。同じ文でも、イントネーションによって意味が変化します。例えば (a) は「明日パーティをする」という平叙文、(b) は「明日パーティがあるの？」という疑問文に聞こえます。[■005]

- (a) we'll have a PARTy tomorrow
- (b) we'll have a PARty tomorrow

文はまた、強弱のリズム (rhythm) を持ります。文は単語を組み合わせて

つくりますが、文には強く発音される語と弱く発音される語があります (→ Q.24)。上の文では通常 have, party, tomorrow の 3 つの単語を強く発音し、we'll と a を弱く発音します。この強弱が、吹奏楽の打楽器のように、文の土台となるリズムを刻む役割を持っているのです。

まとめると、文は「イントネーション」というメロディと、強弱の「リズム」からなります。

単語の発音

次に単語に目を向けてみましょう。単語は強勢 (stress) を持ります (→ Q.10)。party や tomorrow は、それぞれ par- と -mor- の部分を強く発音します。このとき、単語を音節 (syllable) に分けることが役立ちます。party は 2 音節で第 1 音節が強勢を持ち、tomorrow は 3 音節で第 2 音節が強勢を持っています。

単語はまた、母音 (vowel) (→ Q.12) と子音 (consonant) (→ Q.13) によって構成されます。have, party, tomorrow を例に確認します。

| | | |
|----------------|-------------------|----------------------|
| have | party | tomorrow |
| /há <u>e</u> / | /pá <u>ɾ</u> .ti/ | /tə.má <u>r</u> .oo/ |
| CVC (1音節) | CV.CV (2音節) | CV.CVC.V (3音節) |

上の例で母音は V、子音は C で示しています。have は 3 つ、party は 4 つ、tomorrow は 6 つの音で成り立っています。これは英語の音の数え方ですので、もしかしたら日本語の数え方とは違うと感じるかもしれません。

英語発音を構成する主な要素は、この Q で紹介した「イントネーション」「リズム」「強勢」「音節」「母音」「子音」であり、これらは音声指導をする上で、ぜひ覚えておきたい概念です。Q.8 から Q.13 で順番に説明します。

ポイント

- ・強弱のリズムは文の土台、イントネーションは文のメロディ
- ・単語を構成する音は母音と子音
- ・単語には、強く発音される強勢を持つ音節がある